

# 「令和元年度（2019年度）卒業生アンケート」 大学教育への満足度および学修状況に関する項目の分析

筑波学院大学 IR 担当

## 調査の概要

筑波学院大学では、昨年度の卒業生を対象に「令和元年度卒業生アンケート」を実施している。調査項目は学生生活や経済支援に関する項目まで多岐にわたるが、本稿では卒業生の大学教育への満足度および4年間の学修状況に関する自己評価を分析し、これからの教育の改善に活用するものである。

実施時期：2020年3月12日（卒業式）

調査対象：2019年度 経営情報学部卒業生

調査方法：卒業生を対象とした全数調査、質問紙によるアンケート方式で実施

調査目的（アンケート教示文より）：

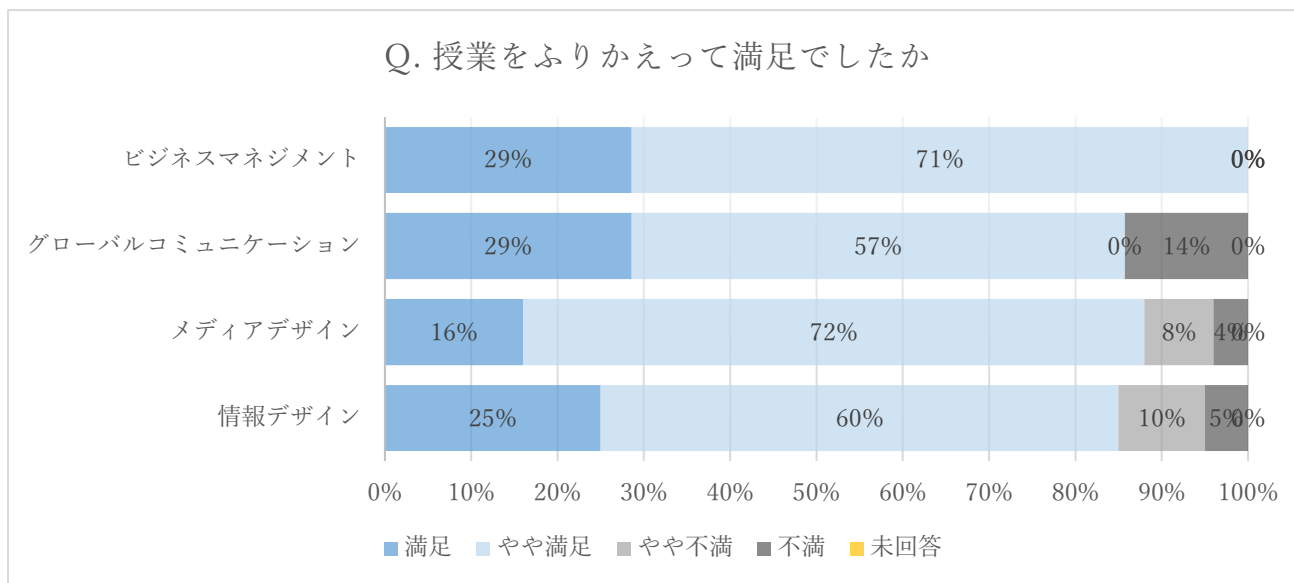
この調査は、本学がより良い教育の実現を目指すために行うものです。ご協力をお願いします。  
該当する項目に○をつけてください。

なお、この調査は無記名で提出してください。本調査以外の目的で使用することはありません。

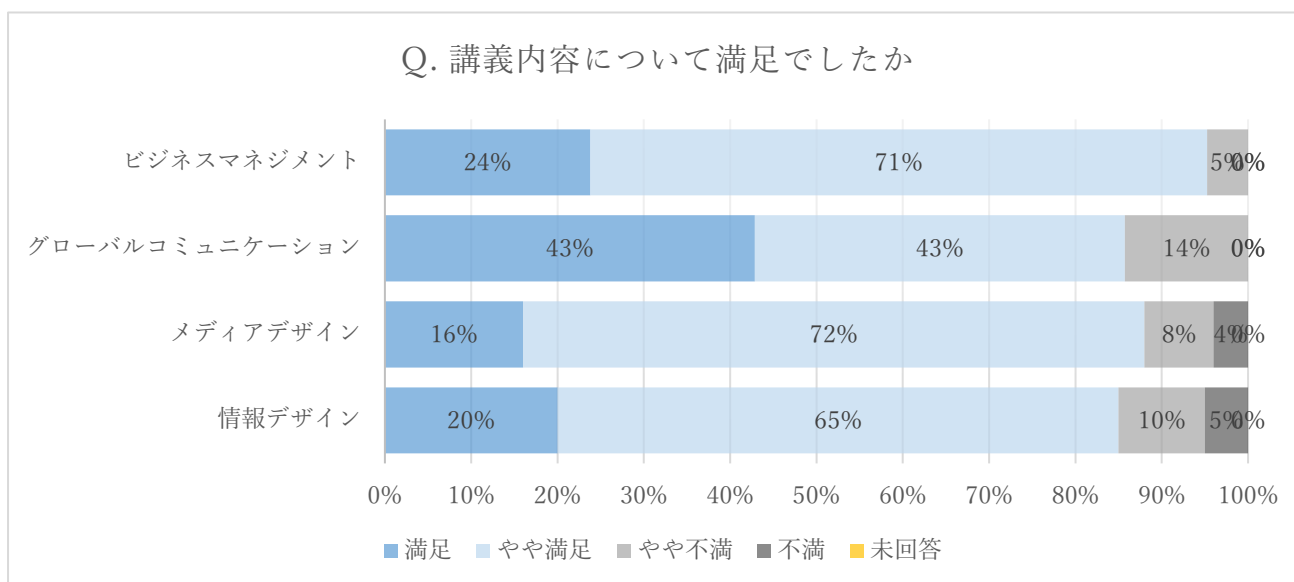
## 回答者数

専攻したコース	回答者数
ビジネスマネジメント (BM)	21名
グローバルコミュニケーション (GC)	14名
メディアデザイン (MD)	25名
情報デザイン (ID)	20名
計	80名

調査結果「大学教育への満足度」より

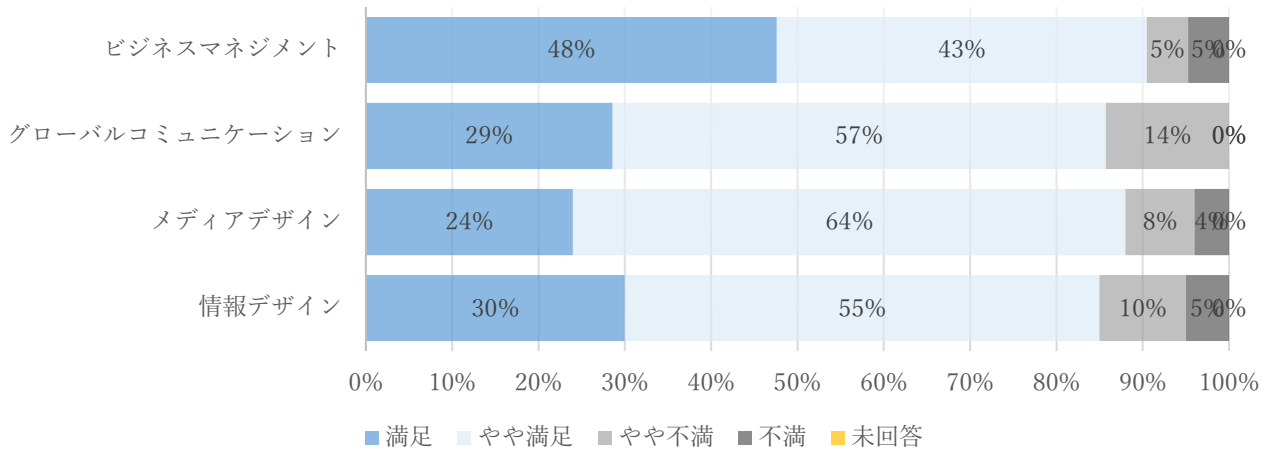


授業全体への評価は概ね肯定的なものとなっていた。一部「不満」の評価があるが、特定のコース科目に対する評価とは捉えず、慎重に精査することが望まれる。前年度との比較からは、「満足」の割合が少なくなっている。一方で前年度と比較して教育課程の大幅な変更などなかったことから、評定した卒業生が前年度に比べ全体的に厳しい評価をしていると推察される（以下の結果にも同じ傾向が認められる）。



講義内容への評価は概ね肯定的なものとなっていた。コースごとに比較すると、GC コースを専攻した学生の満足度は概ね高かったと言える。一方で本年度の特徴としては、MD コースと ID コースを専攻した学生の「満足」の割合が前年度に比べ低く、「不満」を示す学生が一部含まれていた点にある（「やや不満」「不満」に関する分析は次項に預ける）。

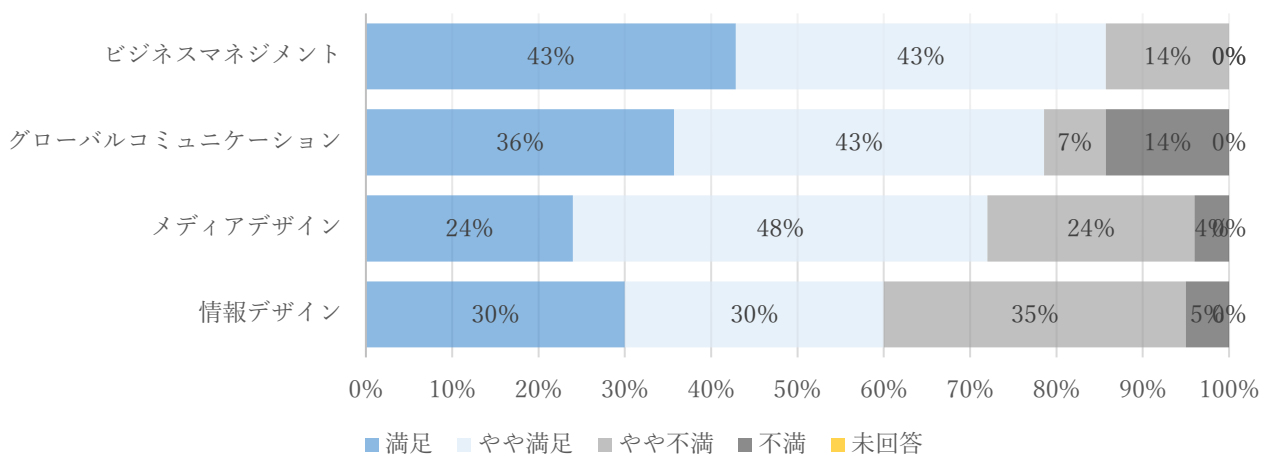
Q. 実習・演習科目,卒業研究などの授業内容について満足でしたか



実習・演習系科目の満足度については、前出の回答と比較して「やや満足」と「満足」の割合が異なり、BM・MD・IDコースの「満足」の割合が高くなり、GCコースでは低くなっていた。

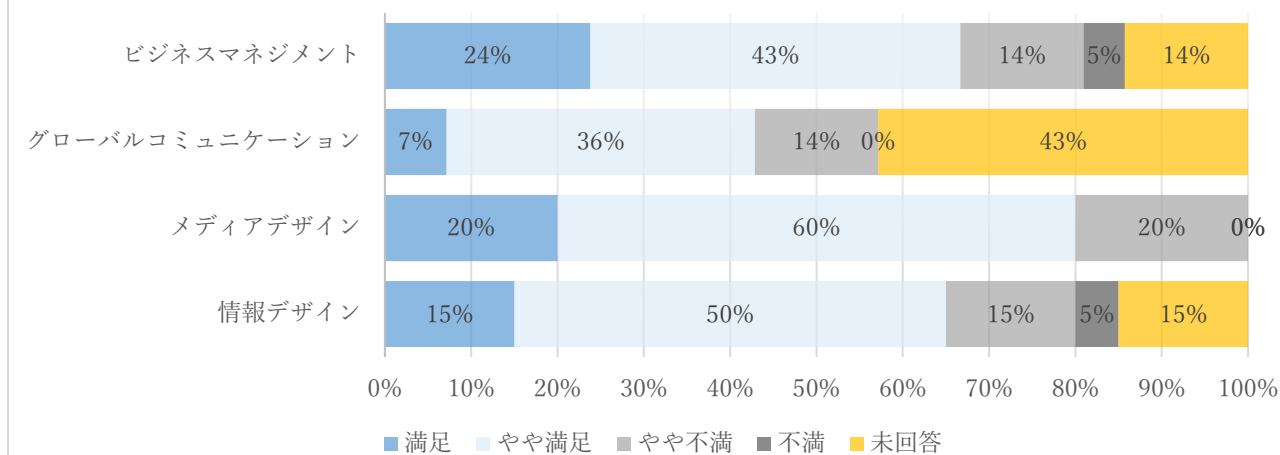
ここまでの質問項目について、否定的な評価する学生の割合がほぼ同じであった。これは、特定のコースのカリキュラムに不備があると捉えるよりは、一部学生が全体を通して不満であったことを主張していたと考えられる。個別のニーズについては講義・演習・実習系授業への不満か、または特定の卒業研究の指導に関するものかは引き続き検証する必要がある。

Q. 学習支援に関するサービスについて満足でしたか



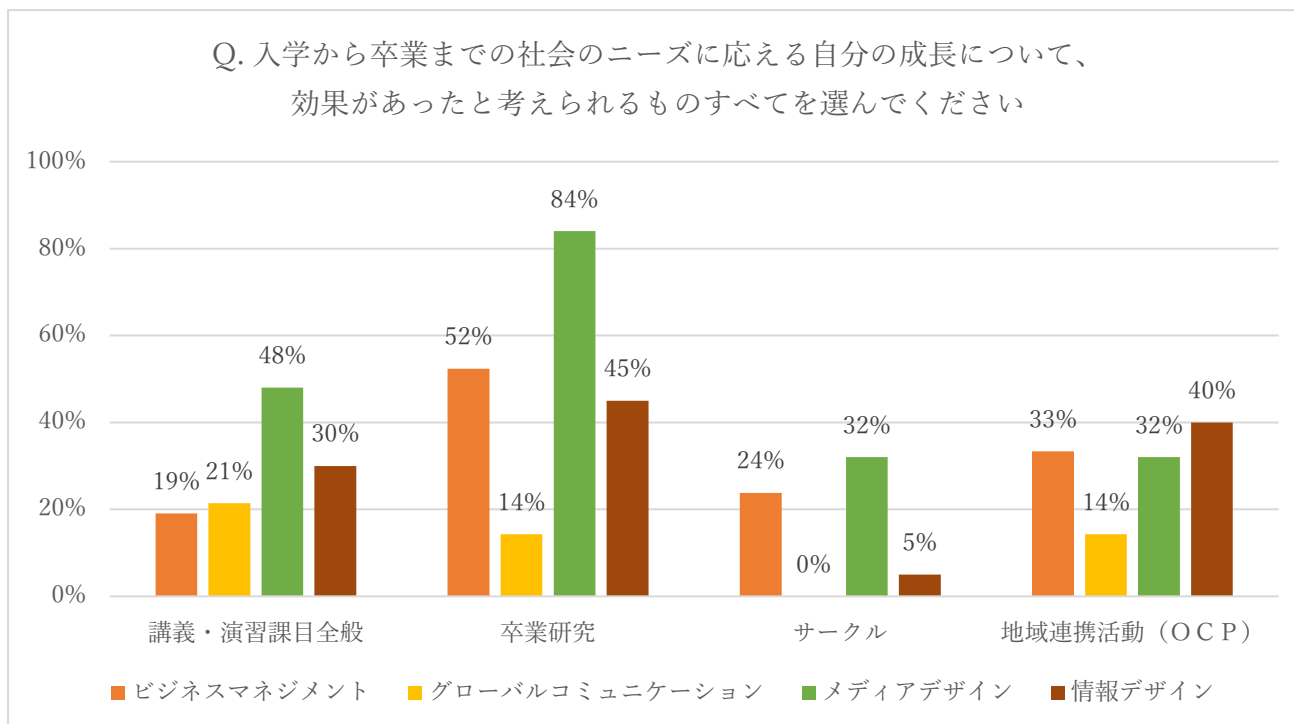
学習支援サービスについては否定的な評価が多く、前年度と比較するとGC・MD・IDコースの「やや不満」「不満」の割合が高くなっていた。通常のカリキュラム以外での多様な支援を求めていることが伺え、それに訴求するサービスを教学側から提供されなかった点は今後の課題であろう。

### Q. 資格取得講座の種類、内容および支援について満足でしたか



他の質問項目と比べ「未回答」の割合が多かった。これは、資格取得に対しての教育サービス全般が、4年間を通して提供されなかったことを反映したものと考えられる。前年度は情報システムコース（現 ID コース）で顕著だったが、学生のニーズからは資格支援は全学的に検討すべき課題であろう。

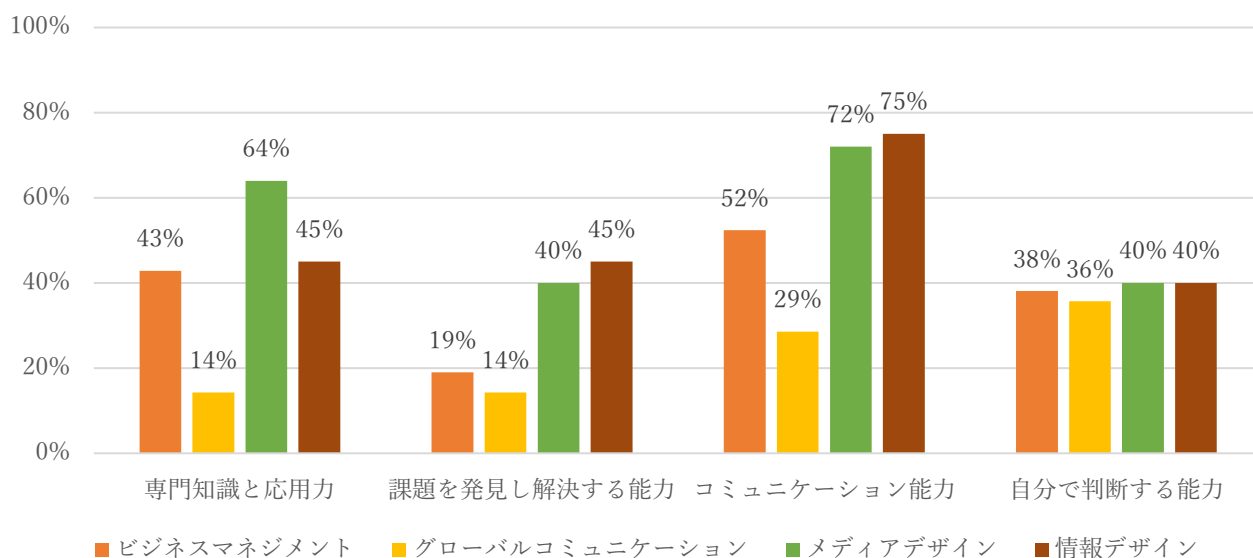
調査結果「学修状況への自己評価」より



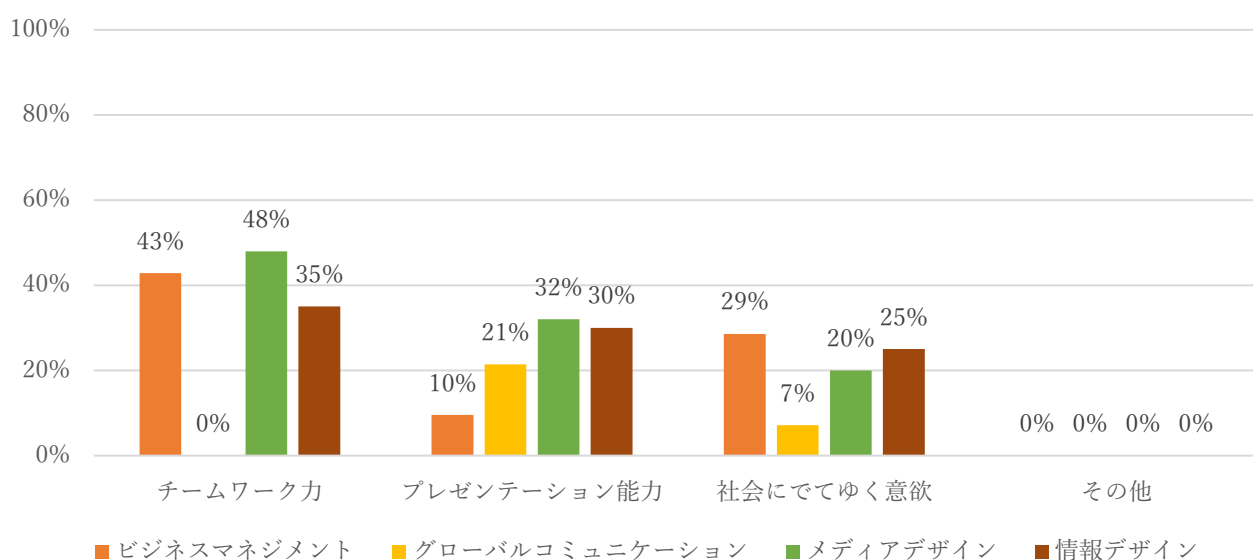
MD コース専攻の学生は他コースと比較して、専攻した分野での学習成果による成長を高く評価している傾向が伺え、その傾向は前年度と共通している。一方で卒業研究については、GC コース専攻の学生があまり社会のニーズに応える自己成長につながっていると感じてない傾向は前年度と類似している。複数選択式の調査で、GC コースの学生は「効果があった」と選択した割合自体が低く、その傾向も前年度と共通している。全体としては、サークル活動のような学生の自主的な活動よりも、大学教育として提供したものの効果を高く捉えており、前年度と傾向は同じとなっていた。

コース毎にみると、2019 年度卒業生は GC コース所属の留学生の割合が高くなった学年でもあった（コース内の留学生の割合：2017 年度 28.9%（ただし経営経済コース）、2018 年度 31.3%、2019 年度 52.2%）。原則として日本人学生と外国人留学生での教育研究に係る指導方法に差異はないが、日本語能力の低い留学生への指導に教育コストがかかる中で生じた結果を含意している可能性はある。本学は外国人留学生の占める割合が今後も高い状態が続くため、留学生への学習支援もより充実させる必要がある。

Q. 学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、  
すべて選んでください (1)



Q. 学生生活をふりかえり、自分が成長したと思える点はどれか、  
すべて選んでください (2)



成長に関する自己評価では、コースごとの傾向は以下の通りであった。

BM コースは専門知識、コミュニケーション能力、チームワーク力などの成長を感じており、前年度と比べると専門知識やチームワーク力の成長をより評価した結果となった。コース科目や発展科目等でアクティブラーニングやPBLが増えたことがひとつの要因と推察される。

GC コースは全項目を通して成長を感じた評価が低く、チームワーク力に関しては回答者 0 となっていた。前項で指摘した通り外国人留学生の割合が高く、チームで行う教育研究に従事するのが難しい学

生が多かったことが反映されているかも知れない。

専門知識と応用力の成長を高く認めたのは MD コース専攻の学生で、前年度と同じ傾向を示した。加えて本年度はコミュニケーション能力の成長を感じた学生が多かったことが特徴的であった。また ID コースの評価で特徴的だったのも、コミュニケーション能力の成長を体感した学生が多かった点である。この点は前年度の結果と同じ傾向を示している。いずれのコースも IT 機器を利用した課題解決型の科目が多い中で、所属する学生のコミュニケーション能力の成長を感じた原因がどこにあるかは慎重に精査する必要がある。

## 総括

本稿では卒業生の大学教育への満足度および 4 年間の学修状況に関する自己評価を分析した。4 コースを専攻した卒業生の満足度や自己評価を相対的に分析したが、前年度同様、教育への満足度や自己成長がそのままコース科目と直結していると判断するのは避けるべきである。調査人数がかなり少ない中での結果の解釈になるため、年度ごとのデータにもかなりのばらつきが認められることは前年度分析でも指摘しているところである。

2018 年度の調査結果との推移から推察すると、本年度は一部厳しめの評価をする卒業生が多く、かつ提供された教育サービスごとではなく全体的に低評価をしたことが伺えるため、ネガティブな評価に対しても慎重な判断をすべきである。また昨年度からの推移から、資格取得の支援が少ないことは共通しているが、それ以外の変化については数年間の推移を確認した上で各コースの傾向や改善するポイントなどは判断すべきであろう。

(2020.6.1 作成)